With you

第 6 章：your my stiation

麻耶もその気になり、おちん〇んを手にとって、手際よくうジャのものとなったあたしのカラダの中に導きました。それはまるで真空に吸い込まれるように、何の抵抗もなくあたしのカラダの中に入りました。

花恋：（あんなにあっさりあたしの中に入っちゃうなんて…）

麻耶 in ヒロ：「何…これ…あたしのおちん〇んが花恋のに…まとわりついて離さない…」

このヒロ君のカラダを操っているのが女の子なんてとても思えないです。ヒロ君になっている麻耶は初めて経験する男の快感を声に出しています。いつものヒロ君では見れない行動です。

花恋：（このヒロ君もなんか初々しくて可愛い💕 でもヒロ君を早く取り戻すために、麻耶に早々に逝ってもらわないと…）

麻耶はヒロ君の肉棒を巧みに使いこなし、あたしの中に出し入れしています。あたしになったうジャもあたしと思えないほどエッチな表情になりその快感を受け続け、それを優しく包み込み、ヒロ君に刺激を返します。うジャはあたしのカラダを使ってヒロ君の肉棒をとらえて更に締め付けます。それに応えるようにヒロ君のおちん〇んが大きく硬くなり、あたしのカラダの奥へと進んでいきます。

麻耶 in ヒロ：「これが男の人の…快感・・・いい…んっ…でも今のあたしは男…もう少し頑張って、花恋をもっと気持ち良くさせてあげたい！」

ヒロ君に乗り移っている麻耶はヒロ君の肉体の虜になり始めていましたが、逝くのをこらえてあ

たしのカラダを気持ち良くさせてくれようとしています。麻耶は、あたしのカラダにピストン運動で刺激を与えながら、あたしの胸に口を近づけ、吸い始めました。あたしはゆっくり上半身を回転させ、腰をくねらせますが、麻耶の口は胸を追いかけ吸い続けます。

うジャ in 花恋:「う…おおぉ…はぁ…くっ…胸と股間から電撃が…これが女…俺は麻耶を逝かせなければならないのに…」

あたしとなったうジャは麻耶を攻めながらも自らも快感の波に耐え切れず声を漏らします。その声は男である誇りを必死に保っているように思えました。

麻耶 in ヒロ:「いいでしょ…女性の快感…その快感とどうしたら気持ち良くさせてもらえるか…良く覚えておくのよ、うジャ…」

うジャ in 花恋:「麻耶…スゴイ…俺、男なのに…意識がぶっ飛ぶ…」

麻耶 in ヒロ:「男？今は女でしょ？さあ、つまらないプライドは捨てなさい…そうすればもっと気持ち良くなれるわよ…」

あたしとなったうジャは麻耶のその言葉とあたしのカラダの感覚に支配され、ついにあたしと同じ女の喘ぎ声に変わりました。

うジャ in 花恋:「…あ…ああん、はあん…」

花恋:（あたしのカラダは最高潮に感じちゃってる💕…でもまだ逝ってはダメよ。あなたには麻耶を逝かせてもらわなければならないんだからね…）

うジャの雰囲気が変わり女性のオーラを発し始めました。うっとりとした表情ながらも積極的に腰を振るようになり、ヒロ君の手と恋人繋ぎをしています。満ち足りた表情は女そのもので、麻耶も満足そうです。麻耶もあたしのあそこに刺激を与え続けながら、あたしのおっぱいを吸い続けています。あたしのおっぱいから出た蜜をヒロ君になった麻耶は美味しそうに口に含み飲み込みます。あたしの蜜はヒロ君の肉体に流れ込んでいきます。

うジャ in 花恋:「いいよ…麻耶、俺の…蜜あげる💕 俺…あたしの一部が麻耶のナカに入るの…受け取って！」

麻耶 in ヒロ:「うん。貰うよ。うジャの女の子。あたし…もうダメ…逝っちゃう！逝っちゃうよ～～💕」

女となったうジャの奉仕にヒロ君の麻耶もついにおちん〇んから濃厚な蜜を発射しました。その蜜はどくどくとあたしの中に注がれました。

花恋:（なんて激しいの…こっちまで興奮してしまったわ…でもこれで、ヒロ君は元に戻れる。）

第 7 章:リアルをカラフルに超えようぜ

麻耶 in ヒロ:「しょうがないわね。約束だから…まあ、ヒロ君のカラダ気持ち良かったからいい経験ができたわ。」

麻耶はヒロ君のカラダから抜け出し、ヒロ君の意識が戻りました。

ヒロ:「やっと自由になったか…」

ヒロ君は中からすべてを見ていたようで、すぐに今の状況を理解しました。

ヒロ:「あの…麻耶さん、何故裸なんですか…服は…？目のやり場に困る…」

麻耶:（あ、もしかしてあなたのカラダの中に…）

ヒロ:「…服だけ俺に乗り移っているってことですか？」

麻耶:（うん…まあ害はないから…このままってことで…）

ヒロ:「本当に害はないんですね？」

麻耶:（ええ…男の人に乗り移った女性の幽霊が同じ経験あるって幽 TUBE で見たけど…大丈夫だったよ。！…あ、その後、その男性、女装に目覚めちゃっちゃんだけど…）

ヒロ:「ダメじゃん…お願いしますからもう一度俺に乗り移って服を着たまま出てきてください。」

麻耶:（わかったわよ。）

麻耶は再びヒロ君に乗り移り、ヒロ君のカラダの中で服を着ると、そのまま出てきました。それからあたしは自分のカラダに戻ろうと幽体を重ねましたが…

うジャ in 花恋:「あれ？抜け出せない？」

麻耶:（これは…花恋のカラダがうジャを花恋として認識してしまったのかも…）

花恋:（私は幽霊のまま元のカラダに戻れないってこと？）

予想外の出来事に辟易するあたしとヒロ君…

ヒロ:「一時的なものかもしれないから時間を置いてまた試してみよう。」

あたしは頷き、ふとベッドを見ると、うジャはあたしのカラダであぐらをかいていました。

花恋:(ちょっと！あたしのカラダにそんな恰好させないでよね。)

途端にうジャは誘うような艶めかしいポーズを取りました。

うジャ in 花恋:「こんな感じかしら～💕」

花恋:(それはもっと止めて～～！もう…あぐらでいいから…)

麻耶:(う～ん…あたしもヒロ君のカラダを使いこなしていたと思うけど、無事抜けれたから…！)

ヒロ:「麻耶さんもうジャも悪意を持って俺たちに乗り移った訳じゃないが、花恋を早く元に戻してあげたい。麻耶さんは幽霊の仲間から何か情報が得られないか調べてくれないか？必要ならいつでも俺のカラダを貸す。花恋はここにいて幽 TUBE で何か情報がないか検索して欲しい。」

花恋&麻耶:(わかったわ！)

麻耶はそう言うと空へと旅立って行きました。

ヒロ:「うジャはしばらく幽霊だったから、取り敢えず一人のときも生活できるようにしないとな。)

花恋:(そうね…お仕事の方はしばらくお休みすればいいけど、ヒロ君もお仕事あるし、ずっとこのまま一緒って訳に行かないわね…)

ヒロ:「よし、俺が案内してやる。ついてこい。」

ヒロ君は花恋になったうジャに街を案内してあげました。うジャが乗り移っているあたしは、容姿はあたしでも表情や仕草が違うだけで別人のように見えます。

うジャ in 花恋:「幽霊としてこの街を見てきたけど、実際に生身の肉体で歩いてみると違うものだな。」
ヒロ:「今のお前は花恋だ…花恋になりきれとは言わないが、花恋のカラダ大切に扱ってくれよ…」
うジャ in 花恋:「ああ…俺だってこのカラダが傷つくのは望んでいない。」
ヒロ:「なあ、お前と麻耶さんはどういう関係なんだ？」
うジャ in 花恋:「ただの幽霊友達だよ。」
ヒロ:「俺にはそうは見えないけどな…」
うジャ in 花恋:「どういう意味だよ。恋人だって言いたいのか？」
ヒロ:「俺たちのカラダを使ってあそこまでしておいて、違うのか？」
うジャ in 花恋:「あのときは一時的にカラダを借りてる認識だったんだ…俺たち幽霊にそんな関係はないよ。お互いに好意があったとしても行為に及ぶことはできない。食べたり、遊園地で乗り物に乗ったりとかもできないからそういうデートもなしだな。」
ヒロ:「エッチやデートができなくても恋人になれるんじゃないか？」
うジャ in 花恋:「ヒロ、お前はそうなのか？」
ヒロ:「もちろんだ。と言いたいところだが…確かにエッチをすることで愛は深まると思う。あのときの麻耶さんとうジャは男女が逆転していたとしても確かに心が繋がっていたと思うよ。」
うジャ in 花恋:「ああ、そうだな…このカラダから出て自分のカラダを手に入れることができたら、いつかまた…」
うジャとヒロは街を散策し夕方、あたしの部屋に戻ってきました。ほどなく麻耶も帰ってきました。
うジャ in 花恋:「麻耶いる？」
麻耶:（どうしたの？）
うジャ in 花恋:「麻耶は幽霊になってから恋人が欲しいって思ったことある？」
麻耶:（いきなりどうしたの？……ないよ。でもいつか肉体を持つことができたら欲しいって思ってる💕ヒロ君のカラダが気持ち良かったから男でもいいけど、やっぱり女の子がいいかな…）
うジャ in 花恋:「そう…なんだね…」
何かを思い詰めたような神妙な表情になるうジャ in 花恋。
麻耶:（どうしたの～うジャ？あ、もしかしてあたしと恋人になりたい、とか…？）
うジャ in 花恋は麻耶に聞こえないよう呟きました。
うジャ in 花恋:「うん、俺もいつか君と…」

第 8 章: We are hope！

2 週間が経ちました。先週からあたしに乗り移っているうジャは、お仕事を再開しました。これ以上休めないからと言って。麻耶も毎日、幽霊から話を聞いて解決の糸口を探しています。あたしは大好きなベリーダンスもできないし、美味しいスイーツを食べたりもできません。疲れたり眠ったりする必要はないけど、こんな生活がとても寂しいとは思いませんでした…ヒロ君もお仕事はないときはあたしの部屋に滞在し、あたしと一緒に過ごしてくれています。それがあたしにとって心の拠り

所となりました。ヒロ君はあたしの前では、極力食べていないような気がしました。最近、少しやつれてきた気がします。

花恋:（ヒロ君、あたしに気を遣わないで食べていいからね…）

ヒロ:「ああ、そうだな…」

花恋:（麻耶も最近帰りが遅いんじゃない？あたしのためだけじゃなく麻耶の好きなこともやっていいからね…）

麻耶:（うん。もともとあたしは、幽霊仲間とお話するくらいしか楽しみがなかったから。でも今はこうしてあなたたちと共に過ごせている。こんな経験貴重だし、有意義だわ。あたしね、花恋を助けたいの。だから自分のできることをしたいの。）

うジャ in 花恋:「俺も麻耶と同じ気持ちだ。俺のできることは花恋さんが元に戻ったときに支障ないように引き継ぐこと。花恋さんの仕事もやってみると結構面白いし、何より誰かの役に立っているっていう実感が持てる。」

ヒロ:「みんな花恋のためにってのもあるけど、自分のためにもなっているってことだな。」

花恋:（ヒロ君は自分のやりたいこと、ちゃんとできてるのかな…もしそうじゃないとしたらあたしは…）

うジャ in 花恋:「花恋さん、俺、べりーだんすって言うのもやってみたいんだけど…」

花恋:（いいけど…初心者には慣れない動きがあって難しいわよ。）

うジャ in 花恋:「俺、頑張って次のショーに出てみたいんだ！」

花恋:（いいわ。じゃあ、あたしが教えてあげる。あたしについて来れるかしら？）

うジャ in 花恋:「はい！花恋先生！お願いします。」

ヒロ:（花恋のモチベーションが上がった。ありがとう、うジャ。）

　それからあたしはうジャにベリーダンスのスキルすべてを教え込みました。あたしが教えている時間以外にもうジャは野球、バスケ、バレーとスポーツを始めました。体幹を鍛えるためというのと、動いているときも女性らしい所作を身に着けるため、ということです…確かにうジャが乗り移ったあたしは表情はうジャのままですが仕草や言動はあたしらしくなってきました。

ベリーダンスを踊っているときのあたしは、もうあたしにしか見えないくらい表情もあたしです。何よりもあたし以上に練習し、健康に気を遣い、自分が美しく見えるように意識するようになりました。会社で同僚と楽しくおしゃべりしたことや、街で可愛い服や小物を見つけたっていう話もするようになりました。

そしてレストランでのベリーダンスショー当日。可愛く着飾ったあたしのうジャが華麗に舞いました。もうどこからどう見てもあたしにしか見えないです。

…

ショーが終わった後、麻耶がうジャに声を掛けていました。

麻耶:(花恋？もしかして元に戻ったの？)

うジャ in 花恋:「いや…あたし、違った…俺はうジャだよ…」

ヒロ:(もしかしてうジャの魂が花恋の肉体に影響を受けている？このままだと更に花恋が元に戻れないことに…)

第 9 章：託された幸せと…

　月日は流れました。花恋とヒロ君も毎日、情報収集してくれいてます。でもあたしたちの状況は全く変わらずです。いやその日、あたしだけに突然変化が現れました。

花恋：（何？あたしのカラダが消えかかっているんだけど…）

麻耶：（！！…幽霊は死なない…消滅するのは満足したときと…）

うジャ in 花恋：「絶望したときだ…」

花恋：（確かにあたし…諦めかけてる…）

ヒロ：「花恋！気持ちを強く持つんだ！」

花恋：（無理だよ…もう…何をやっても変わらないから…それにうジャもあたしらしく振舞えるようになってるし、そのカラダにいるのはあたしじゃなくても…）

うジャ in 花恋：「俺は花恋さんの真似をしているだけだ。花恋さんじゃない。このカラダは花恋さんのものだ！」

花恋：（可愛くなったよ、うジャ。それに麻耶も最初は憎らしかったけど、今はあたしのために一生

懸命だし感謝してる。でもあたしのためにそうしてくれるのも辛くなってきて…あたしね…ヒロ君と出会えて良かったよ…こんなに大切にしてもらったの、初めてだったから…毎日が充実していた…）
ヒロ:「麻耶、何か花恋さんを引き留める手はないのか？」
麻耶:（残念だけど…こうなってしまってはもう…あたしが軽はずみに花恋に憑依しようとしなければこんなことには…あたしは間違っていたのかもしれない。でももう後戻りはできないの…ゴメンね。花恋、ヒロ君・・・）
うジャ in 花恋:「花恋さん！早くこのカラダに入るんだ…」
　あたしはダメ元で自分のカラダに幽体を重ねます。しかし…
うジャ in 花恋:「何で！何でだよ！俺だって…こんなことは望んでないのに…」
麻耶:（花恋！今状況が変わらなくてもいつかきっとチャンスは来るわ！諦めちゃダメよ！ヒロ君のためにも！）
花恋:（麻耶も自分を責めないで！あたしも幽霊になってあなたたちの気持ちは良くわっかたわ……地震で両親を亡くしたあたしにとってヒロ君はあたしの心の支えだった。あたしは十分幸せな時間を過ごした……でもヒロ君はあたしの分まで生きて！）
ヒロ:「花恋がいない世界なんて、俺は…そうだ！麻耶さん、俺のカラダを乗っ取ってくれ！俺が幽霊になって花恋と一緒に…」
麻耶:（それは…できないわ…）
花恋:（世界はまだヒロ君を必要としているし、ヒロ君にとってもまだまだ楽しいことはあるよ…それにもう失う悲しみは嫌なんだ…だから…誰も恨まずこの気持ちのまま…）
　あたしの姿が更に薄くなります。意識も朦朧としてきます。ヒロ君は何か思いつめたような表情をしています。
花恋:（もうダメみたい…お別れだね…）
　突然、ヒロ君があたしに覆いかぶさります。
ヒロ:「やっぱり花恋を逝かせはしないよ。逝くのは…俺でいい。」
　あたしはヒロ君のカラダに吸い込まれます。代わりにヒロ君のカラダから幽体が出てきます。
花恋:（ヒロ…君？）
ヒロ:（俺の方こそ、花恋と出会えて幸せだった…未練はない…ありがとう。）
　ヒロの幽体はあっと言う間もなく跡形もなく消えてしまいました。呆然とする 3 人。優しい感覚に包まれてあたしは肉体の感覚を取り戻しました。
花恋 in ヒロ:「ヒロ君…未練がないなんて嘘…」
　ヒロ君のカラダは既に涙で溢れていました。あたしはその涙を惜しげもなく流し、いつまでもその場で佇んでいました。
うジャ in 花恋:「おそらくヒロは花恋さんがこうなった場合、この決断を採る覚悟を決めていたんだろう…」
麻耶:（そうね…よほど強い決意がなければとっさにあんなことはできない。それにあの消え方…本当に満足したときは一瞬で消えるの…ヒロ君が満足していたっていうのは間違いなく本心だと

思うよ…）

第 10 章：レター

傷心したあたしは自分の部屋にいることが辛く、ヒロ君の部屋に行ってみました。配達物が多くポストに溜まっていました。ヒロ君はあの日からずっとあたしの部屋にいてくれていたので、ほとんどここにには帰って来ていなかったようです。そこで 1 枚の手紙を発見しました。そこには麻耶とうジャが言った通りのことが手紙の冒頭に書かれていました。そしてこう綴られていました…

「花恋へ

この手紙を花恋が読むときは、花恋が俺のカラダに入っているのではないかと思う。

……

麻耶さんが俺に、うジャが花恋に乗り移れるってことは、俺と花恋も同じように互いのカラダに乗り移れるって思ったんだ。俺たちは似たもの同士だから。愛する者を失うのは辛い。でも生きていればきっとそれ以上に良いことや楽しいことがあるはずだ。俺は花恋と出逢えてそう思えるようになってきたんだ。

……

女の花恋にとって男の俺のカラダは戸惑うかもしれない。でも花恋は俺の過去にこだわったり、俺になり切ったりする必要はなく、花恋の思う通りに生きて欲しい。そのカラダはもう花恋のモノだ。好きに使っていい。花恋の好きな服を着て、同僚と女子会をしたり、週末にダンスをしたり…花恋なら俺のカラダでも楽しめるんじゃないかな。

俺は遠くからいつまでも花恋の幸せを心から願っている。」

花恋 in ヒロ：「ヒロ君、あたしには無理だよ…」